

犀川大橋の架橋100年を契機に シビックプライドを醸成した取組について

檜崎 由磨¹・水野 力斗¹・阿部 良司¹・櫻井 彰¹・熱海 孝寿¹

¹金沢河川国道事務所 計画課 (〒920-8648 石川県金沢市西念4丁目23番5号)

金沢河川国道事務所が管理する浅野川大橋と犀川大橋が2022年、2024年にそれぞれ架橋100年を迎えるにあたり、地元団体や行政機関で構成される「浅野川大橋・犀川大橋 百寿会」を設立し、公民連携・地域連携による情報発信やイベント等の取組を行ってきた。本稿では、多くの人々の生活や地域の発展を支えて続けて今年で100歳（百寿）を迎えた犀川大橋に着目し、架橋100年を契機にシビックプライドの醸成や後世に永く伝えていくことを目的として地域と一体となり開催した犀川大橋百寿祭に関する取組について報告する。

キーワード 犀川大橋、シビックプライド、100年、地域連携、賑わい創出、広報、SNS

1. はじめに

金沢市街地には、浅野川と犀川という川が流れており、2本の川にかかる橋の中で、加賀藩祖である前田利家が1594年に架橋したといわれるのが、初代の浅野川大橋と犀川大橋である。最初の架橋から洪水や氾濫等により幾度も架け替えが行われており、浅野川大橋は1922年に、犀川大橋は1924年に架け替えられたものが、現在もその姿を残している。それぞれ国道159号、157号上にあり、金沢河川国道事務所にて管理している。人々や物流を支え続けてきた2つの橋は、2000年にその価値が認められ、2橋とも国の登録有形文化財に指定された。

本稿では、今年で架橋100年を迎える犀川大橋を称え金沢河川国道事務所が地域と一体となって取り組んできた内容や効果について報告する。

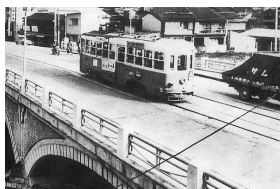


写真-1 100年前の
浅野川大橋

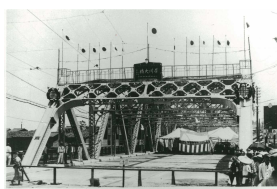


写真-2 100年前の
犀川大橋



写真-3 現在の浅野川大橋



写真-4 現在の犀川大橋

2. 「浅野川大橋・犀川大橋 百寿会」の紹介

(1) 百寿会の設立

金沢河川国道事務所は、浅野川大橋、犀川大橋における100歳のお祝い（以下百寿（ももじゅ）という）にちなんだ取組を進めていくため、2022年5月、県や市の行政機関のほか、12地区に及ぶ地元町会連合会やまちづくり組織、地域団体等を会員とした「浅野川大橋・犀川大橋 百寿会」を設立した。2022年度から2024年度の3カ年を設立期間とし、情報発信やイベントに関する事項についての協議を行うことを規約としている。百寿会での活動を通し、大正、昭和、平成、令和の4つの時代にわたり多くの人々の生活と地域の発展を支えてきた2つの橋に思いを馳せ、その功労を称えるとともに、地域住民のシビックプライドを醸成し、永く後世に伝えることが目的である。

(2) 会議の開催

前述した目的達成のため、2022年度は4回、2023年度は4回、2024年度は5月に会議を開催し、2023年度からは主に犀川大橋の百寿祭について会員による意見交換が活発に行われた。

会議は毎回記者発表を行うことで、テレビや新聞等による報道の機会が増えるよう原則公開の形をとっている。

2023年度から2024年度にかけて、2024年7月7日に開催した犀川大橋100周年を祝う『犀川大橋百寿祭』（以下百寿祭という）に向けたイベントアイデア等に関する意見交換を行った。地元団体からは、「犀川兩岸の商店街

の活性化に寄与」「100周年らしく犀川大橋を花で盛大に彩る」「次の100周年に向けて将来を担う小学生にも積極的な参加を促す」など多数の意見が出た。昨年度末の百寿会では、令和6年能登半島地震で被災した方々に配慮し自粛の方がいいのではという意見もあったが、開催の可否について協議を行った結果、能登より被害の小さい金沢が積極的にイベントを開催し、被災した方々を元気づけることにより、地域の垣根を超えて復興を前向きに進めていくことができるよう、能登復興支援を目的とした企画を取り入れる方針としたことで開催することが決定した。最終的には会員が一致団結し、地元からの多大なる支援を受けながら様々な取組を実施することができた。



写真5 第9回百寿会の様子

3. 百寿祭を盛り上げる取組み

百寿祭の開催に向けて周知を図りつつ、地域の盛り上げにつなげていくための取組を実施するとともに、他の各団体が実施するイベントにも金沢河川国道事務所が積極的に参加することで、百寿祭のPR等を実施した活動内容について紹介する。イベントを実施する際は、より幅広い範囲への広報してもらうことを目的に各団体と共同での記者発表を積極的に実施した。

(1) 百寿橋巡りツアー

今年架橋100周年を迎えた犀川大橋と2022年に架橋100周年を迎えた浅野川大橋の2つの橋を巡るまち歩きツアーを開催した。内容としては、百寿会の委員を講師として浅野川大橋付近からスタートし、浅野川大橋や金沢市周辺に残る“小橋”を巡りながら歴史を紹介し、犀川大橋をゴールとする歴史探訪ツアーであり、約20名が参加したものである。参加者についてはHPやチラシに掲載した二次元コードからアクセスする申込フォームより募集をかけたが、申込を開始してから1週間ほどで定員となり、犀川大橋や浅野川大橋を含む生活を支えるインフラに対する地域住民からの関心が非常に高いことを感じた。



写真6 橋巡りツアーの様子

(2) 出前講座

地域の方々に犀川大橋について知ってもらい、インフラの重要性を認識してもらうことを目的として、一般向けに出前講座を実施した。

2023年にはかなざわ・まち博（以下、まち博という）の中で犀川大橋上で橋についての紹介を行った。まち博とは、金沢のまち全体を博覧会場に見立て、市民が金沢の魅力を再発見できる市民参加型のイベントであり、犀川大橋の管理者である金沢河川国道事務所の職員がプレゼンターとなって、橋の歴史や管理方法を説明することで、生活に不可欠である橋の重要性を地域の方々が再認識できるような機会を設けた。

2024年には犀川大橋近隣の4つの小学校5、6年生を対象に、犀川大橋の歴史や100年間橋を維持するためのメンテナンスについて、出前講座を実施した。後述する「犀川大橋百寿祭」の中で、地域と連携した企画として近隣小学校4校により制作した行灯を展示するプログラムを実施するにあたり、まずは小学生に犀川大橋の歴史やどのような維持管理、点検を実施してきたかを知ってもらうために金沢河川国道事務所の職員が講師となった。講義では子供向けに制作した動画（デジタル紙芝居）を用いて犀川大橋の歴史、変遷を説明し、加えて交通量が3万台を超える犀川大橋を100年維持するためのメンテナンスの重要性を伝え、その後質疑応答の時間を設けた。もともと犀川大橋を知っている生徒がほとんどであり、質疑応答の時間では「なぜこの構造になったのか」「なぜもっと軽いアルミでつくらなかったのか」「なぜ色は青色を採用したのか」といった様々な質問が飛び交い、約30分間質問が出続け1コマが終了した小学校もあり、インフラに対する子供からの興味・関心が非常に高いことを認識した。



写真7 出前講座
（まち博）



写真8 出前講座
（小学校）

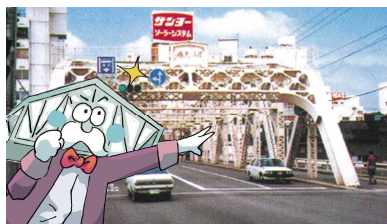


写真-9 デジタル紙芝居の一場面



写真-12 橋みがき・花植えの様子

(3) 地域の主体的な取組

a) 商店街による広報活動

100年にわたり人々の生活や行動を支えてきた犀川大橋の100周年を祝し、片町・野町の両商店街が自主的に100年記念フラッグを制作し、国道157号を中心とした周辺道路に掲出した。また、7月7日に開催した犀川大橋百寿祭のチラシについては、百寿会委員を通して各町会連合会において可能な限り全戸配布または回覧を実施、その他にも店舗の入り口等にポスターを積極的に掲示した。双方の商店街が連携して動き始めることで、犀川大橋を挟む両岸の地域が一体となり、犀川大橋100周年を祝う取組が相乗効果で創出された事例である。



写真-10 フラッグ掲出
(片町側)



写真-11 フラッグ掲出
(野町側)

b) 清掃活動（橋みがき）・花植え

従来より、犀川大橋の清掃活動等に取り組んでいた道路協力団体である「金沢片町まちづくり会議」からも、犀川大橋が今年7月で100歳を迎えるにあたり、人々の生活や行動を支えてきた橋に感謝を込めて、犀川大橋100周年を祝う『犀川大橋百寿祭』に向けた取組の提案があった。犀川大橋の清掃活動については、これまで右岸側の片町商店街で実施されてきたが、今回の犀川大橋百寿祭に関する打合せが契機となって、左岸側の野町の商店街も参加することになった。他にも多数の参加者が集まり、偶然にも約「100」名により清掃活動が行われた。継続した取組がなければ実現が難しかったことであり、片町と野町をつなぐ犀川大橋が地域住民の橋渡しを実現した。また、「金沢片町まちづくり会議」は、犀川大橋の清掃活動と合わせて、百寿会で挙げた花で彩るという意見を踏まえ、百寿祭を盛り上げるべくプランターによる花植えを企画し、これを実施した。この活動も道路協力団体として地域主体の取組であり、地域における犀川大橋への想い入れの大きさや百寿祭に向けて地域一体となって盛り上げていきたいという機運の高さが伺えた。

4. 犀川大橋百寿祭の開催

2024年7月7日（日）に犀川大橋の百寿を祝う『犀川大橋百寿祭』を開催した。

事前の情報発信としては、広告用のチラシを作成し、地域に回覧を行った。また、チラシと併せて金沢河川国道事務所からイベントごとに複数回記者発表を行った。

当日は、18時から21時までの間、国道157号片町交差点から野町広小路交差点までの約400mを全面通行止めとした。当該区間は1日約30,000台の車両が通行しており、記録に残っている限り当該区間において夜間の通行止め実績はなく、片町は繁華街で路線バスの本数も非常に多いことから、車両通行止めにするのは地域への影響を考慮すると難しいのではないかと意見も出ていた。百寿会での議論を経て、1日の中で交通量の少ない時間帯で実施すること、事前周知を徹底することにより、犀川大橋上を歩行者天国にしてイベントを開催することが決定した。開催時間は、一般車両や路線バスの交通量が最も少なくなる日曜日の18時～21時とし、周知については、地域の百寿会委員がそれぞれ住民に通行止めチラシを配布した。さらに、路線バス利用者には、バス停での案内のほか、運転席後ろの車内広告を利用した。広域的な案内としては、前日に新聞広告による案内や、金沢市の行政ライン、事務所の記者発表やSNSなどをフル活用した。その結果、通行止めによるクレームは1件に留まり、周知が行き届いたことが確認できた。これは、公開された百寿会やイベントごとに行った記者発表、X（旧Twitter）等による広報を通して、このイベントに対し広く周知が進んだこともあり、警察や地域住民の大きな協力を得られた結果である。



図-1 チラシ（表）



図-2 チラシ（裏）

イベントは、18時30分から20時10分の間、犀川大橋橋上を歩行者天国として行い、約15,000人が来場した。また、来場できなかった方へ向け、開催の事前告知からプログラム終了まで、Xによるリアルタイムでの情報発信を行い、延べ約50,000回のアクセスを記録した。

百寿祭において、犀川大橋上の記念式典プログラムに加え、その他エリアにおいても歩行者天国区間での祝祭プログラムと題して複数の企画を実施したため、以下で紹介する。



写真-13 会場写真

(1) 能登復興支援に関する取組

百寿祭を開催するにあたり、前段に説明したとおり能登より被害の小さい金沢が積極的にイベントを開催し、被災した方々を元気づけることにより、地域の垣根を超えて復興を前向きに進めていくことができるよう大きく2つの能登半島応援企画を取り入れた。

1つ目は石川県及び輪島市指定無形文化財に登録されている輪島の「御陣乗（ごじんじょ）太鼓」である。打ち手が面を被り陣太鼓を打ち鳴らすものであり、非常に迫力ある演奏であることから、オープニングアクトを務めた。被災した輪島の伝統芸能による御陣乗太鼓による幕開けにより、能登を元気づけ、百寿祭が活気あるものとなった。



写真-14 御陣乗太鼓の様子

2つ目は歩行者天国内の祝祭プログラムとして取り組んだ行灯企画である。百寿祭会場スペースは犀川大橋上だけでなく、通行止め区間である橋詰から各交差点までの国道157号上を広く使うことができ、百寿祭の開催時間が18時30分から20時10分までであることから、暗がりになることを活かした能登半島応援企画ができないか百寿会において議論された。会場の特性に着目し、犀川右岸側に位置する片町は繁華街であり夜は多くの人で賑わい、視覚的に非常に明るい印象であるが、野町側は片町に比べると人通りは少なく、落ち着いた雰囲気であることから、明かりの演出として野町側の道路上行灯を並べることとなった。行灯は復興の願いや鎮魂の祈りを込めて復興イベントでも用いられるものであり、和紙に様々な想いを書き込みライトにより灯すことで能登を元気づけることにつながるのではないかと考えた。行灯については、後述する「地域とのつながり」や「次世代への継承」という目的も取り入れ犀川大橋近隣の泉小学校、犀桜小学校、中央小学校、中村町小学校の4校に制作協力をお願いした。展示する行灯の制作にあたっては、能登復興に向けたメッセージ、犀川大橋に関する思い出や自身の夢等の想いを自由に書き込んでもらった。制作された行灯を見ると、「がんばれ能登 地震に負けるな」といった被災した能登への応援メッセージが多く書き込まれており、復興に携わる職員自身も活力をもらうことができた。当日は総数で約600個の行灯が歩行者天国となった野町側の国道を彩った。



写真-15 制作の様子



写真-16 展示の様子

(2) 地域のつながりを意識した取組

百寿祭においては、犀川大橋が地域の橋渡しの役割を担っていることを意識した取組を実施した。

地域のつながりを意識した取組として、犀川大橋上の記念式典プログラムとして実施した3世代家族による渡橋式があげられる。本プログラムは、これからの100年の安全・安心を祈念するとともに、市民の愛着を深めるため、100年前も実施した親子三世代渡り初めを再現したものである。3世代家族の募集をかけた結果、片町側から1組、野町側から1組が参加することとなった。渡橋式の中で地域のつながりを意識した演出ができないかということで、地域住民と意見交換を重ね、犀川大橋が兩岸の商店街の橋渡しとなるよう、渡橋式は野町弥生地区商店街連盟会長の先導により野町側からスタートし、犀川大橋中央に控える片町まちづくり会議会長と握手を交わし、先導を交代し、片町まちづくり会議会長による先導で片町側の橋詰まで渡り終える演出とした。この演出により、これまで交流の薄かった兩岸の商店街が手を取り合っ、今後共に発展していくことを誓い合ったことが新聞でも報道され、メンテナンスにより地域を長く見守ってきたインフラが地域活性化に寄与する取組の1つとなった。



写真-17 3世代家族による渡橋式の様子

(3) 次世代への継承を目的とした取組

犀川大橋の管理者として、次なる100年に向けた維持管理は今後非常に重要であり、将来の担い手となる次世代に継承することを目的とした取組を以下で紹介する。

犀川大橋だけでなくインフラ全体における将来を背負っていく小学生が主役となるプログラムとして、犀川大橋上の記念式典プログラム「100周年記念プレート除幕式」及び「未来へのプレート贈呈及び行灯企画の紹介」

を実施した。本プログラムでは行灯企画に参加した近隣小学校4校から代表生徒2名ずつの計8名にステージへ登壇してもらった。「行灯企画の紹介」は、代表生徒1名に制作した行灯を手を持って行灯に込めた思いを紹介を行った。行灯には「がんばろう能登」という能登への応援メッセージが込められており、大勢の来場者を元気づけていた。



写真-18 行灯の紹介

「未来へのプレート贈呈」は、行灯企画への参画の感謝と、次の100年に向けて未来を託す意味を込めて、感謝状と未来へのプレートを贈呈した。感謝状と未来へのプレートは、各小学校に飾ることで次世代にあたる子どもたちへの継承を図った。



写真-19 未来へのプレート贈呈

小学生が主役となる犀川大橋上での記念式典プログラムだけでなく、制作した行灯の展示により多くの子供たちの来場を促し、かつ現地で犀川大橋を見ることで犀川大橋を身近に感じてもらうことができた。

加えて、3.(2)で紹介した出前講座は、将来を担っていく小学生に、金沢河川国道事務所の職員が講師となってインフラの維持管理、点検の方法を知ってもらい、小学生からはロープアクセスの写真を見て「カッコいい」「忍者みたい」という意見があったり、犀川大橋の構造・材質に興味津々だったりと非常に好評であり、インフラの役割や維持管理の重要性について将来を担う次世代へつなぐことができたのではないかと感じる。

5. 今後の展開

百寿祭に向けた取組だけでなく、百寿祭以降についても取組も実施している。

百寿祭の中で展示した行灯については、百寿祭終了後に地域の盆踊りで使用したいという声があり、7月20日の旧新堅町小学校で開催された「絆！新堅納涼盆踊り2024」で夜を彩るため展示をした。

また、百寿祭に来場できなかった小学生やご家族にも一定期間見てもらえるよう、夏休み期間中の7月30日～8月29日の約1か月、金沢市役所第二本庁舎を会場に展示している。併せて本会場にはより多くの方々に犀川大橋に対して興味を持ってもらえるよう、百寿祭関連のパネルも展示している。

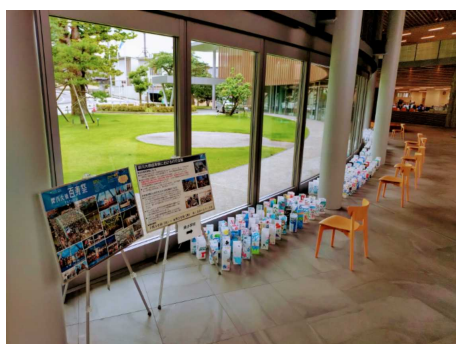


写真-20 展示エリア

また、百寿祭終了後もインフラに対する興味が薄れないような取組として、今年架橋100年を迎えた犀川大橋に関するフォトコンテスト・絵画コンテストを募集している。本コンテストは12月を目途に表彰式を行う予定としており、表彰作品の展示も予定している。



図-3 絵画コンテストチラシ



図-4 フォトコンテストチラシ

が来場し、私たち道路管理者も含め地域全体がインフラの持つ魅力を認識するきっかけとなったことを実感した。

本取組を実施するまで、犀川大橋の両岸における商店街の交流は薄かったが、百寿祭における犀川大橋上での式典プログラムで実施した渡橋式を進めていく中で、両岸の商店街の会長から「今後も地域一体となった取組をしていきたい」というコメントがあったことをはじめ、地域が主体となって百寿祭を盛り上げるべくフラッグの掲出を行ったり、今まで片側の商店街のみの参加であった犀川大橋清掃活動で両岸の商店街が参加し、「継続は力なり」という言葉通り、今年は最大の約100名が参加したりと目に見えて地域の交流が深まったことを認識することができた。

今後、各地に存在するインフラについても、道路管理者の働きかけがなくとも同様な取組が実施され、その取組が広まることで、地域住民のシビックプライドが醸成され、ひいては、官民一体となったメンテナンスに期待ができると考える。

謝辞：「浅野川大橋・犀川大橋 百寿会」として活動していくにあたり、ご協力いただいている地域の皆様や関係各位に深く感謝申し上げます。

6. おわりに

犀川大橋百寿に関連して、官民一体の取組として実施してきたが、イベントを通して百寿祭当日は約15,000人